



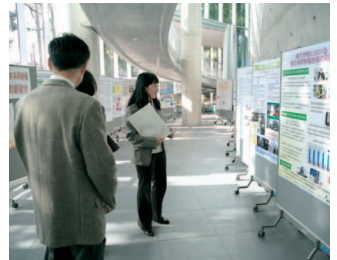
編集・発行

国立大学法人鹿児島大学男女共同参画推進センター 〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24
TEL 099-285-3012 E-mail : gender@kuas.kagoshima-u.ac.jp http://atsumi.kuas.kagoshima-u.ac.jp/

■ 第2回男女共同参画シンポジウム「女性研究者への持続的支援の構築をめざして」を開催



11月29日、鹿児島大学稲盛会館「キミ&ケサ メモリアルホール」において第2回男女共同参画シンポジウムを開催し、教職員、他大学や自治体関係者など222名の参加がありました。本シンポジウムは、平成23年度から3年間にわたり実施してきた文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」の取組を総括するとともに、事業期間終了後の女性研究者の増に向けた女性研究者支援のあり方を展望することを目的としたものです。



部局の取組紹介ポスターコーナー

前田芳實学長の開会の挨拶に続き、(独)科学技術振興機構男女共同参画主監で日本女子大学名誉教授の小館香椎子先生による基調講演、鈴木廣志男女共同参画推進センター長による「女性研究者研究活動支援事業」の事業報告、平井一臣法文学部長、岩井 久農学部副学部長及び白樂善則大学院理工学研究科教授による法文学部・農学部・工学部における男女共同参画推進に係る取組紹介の後、パネルディスカッションが行われ、女性研究者増に向けた女性研究者支援のあり方を巡って活発な議論が展開されました。

また、会場には、各部局の男女共同参画推進の取組を紹介したポスターを展示したほか、参加者に対する保育支援として、託児スペースを設営し、一時保育を行いました。



託児コーナーでの保育支援



小館 香椎子 先生

*基調講演「女性研究者のリーダー育成と輝く未来に向けて—継続の視点から—」 —「女性研究者研究活動支援事業」期間終了後の第2ステージが重要

小館先生は、日本の女性研究者の現状と女性研究者増に向けた政策を紹介した上で、女性研究者のエンパワーメントが科学技術立国・日本には今後不可欠であり、女性研究者研究活動支援事業終了後の大学の内発的な取組につなげていくための各種支援の推進と意識改革を含めた組織全体におけるサポート体制の構築の必要性について指摘。また、「女性研究者自身がチャンスを避けることなく積極的にチャレンジすることが重要で、その意識こそが持続的な女性研究者支援につながる」とし、女性研究者のリーダー育成の必要性を強調しました。さらに、「女性研究者の育成が今後の大学の生き残りのための“起爆剤”となることについて全学で共有することが必要」と述べました。

*パネルディスカッション

—女性研究者の活用は大学の活性化に不可欠

「女性研究者への持続的支援の構築—地方大学の課題克服をめざして—」のテーマで、小館先生、島 秀典理事・男女共同参画推進室長、田島真理子教育学部教授、岩井農学部副学部長がパネリストとして登壇し、コーディネータの鈴木センター長の進行によりディスカッションが行われました。

学内パネリストから、農学部における女性研究者増に向けた取組の成果と課題や、研究支援員制度をはじめとする女性研究者支援の成果と課題が報告されたほか、小館先生からは女性研究者支援の意義と波及効果の観点から助言等をいただきました。

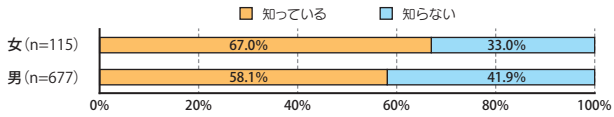
女性研究者が少ない現状の打開策として、学会等のネットワークを活かした公募情報の発信や鹿児島大学や鹿児島県出身の女性研究者の情報の集約による女性研究者の応募増を図ること、女性限定公募やインセンティブの付与などのポジティブ・アクションの積極的な導入、さらに採用後の定着やキャリアアップを促すための各種支援及び環境整備の整備充実等の必要性が指摘されました。また、女性研究者の採用・登用の促進による成果を「見える化」することによる学内の意識改革が持続的な女性研究者支援に寄与することについても確認されました。



男女共同参画推進に関する意識調査結果

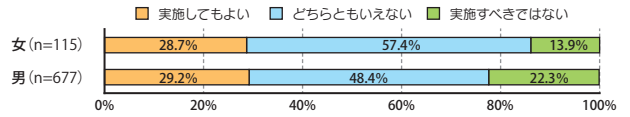
男女共同参画推進センターでは、平成22年度に実施した意識調査の追跡とともに、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」の総括及び平成26年度以降の男女共同参画推進事業のあり方を検討する上で参考とするため、全学常勤教職員及び研究員を対象に「男女共同参画推進に関する意識調査」を実施しました(回答者の内訳は6号に掲載)。主な結果概要は、以下のとおりです。詳細は、別途作成する意識調査報告書を参照ください。

女性教員優先採用制度についての認知度(教員・研究員)



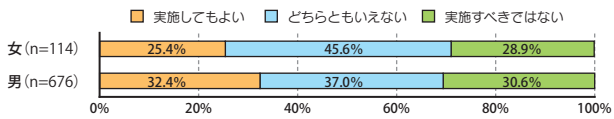
前回調査に比べ男女とも同制度に対する認知度は大幅にアップしている。(男44.2→58.1% 女31.3→67%)

女性教員優先採用制度の是非(教員・研究員)



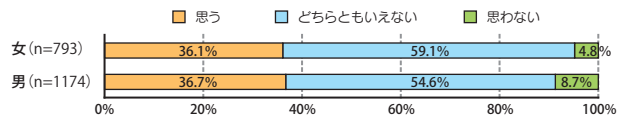
制度の認知が上がったが、支持は3割弱にとどまっている。

女性教員限定公募の是非(教員・研究員)



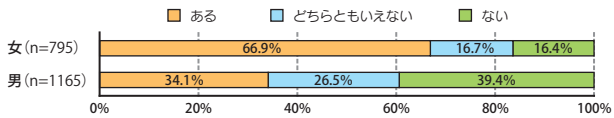
男性より女性は支持が少ない。また不支持も女性教員優先採用制度より増加。

女性教授職・管理職を増やす必要性について(全体)



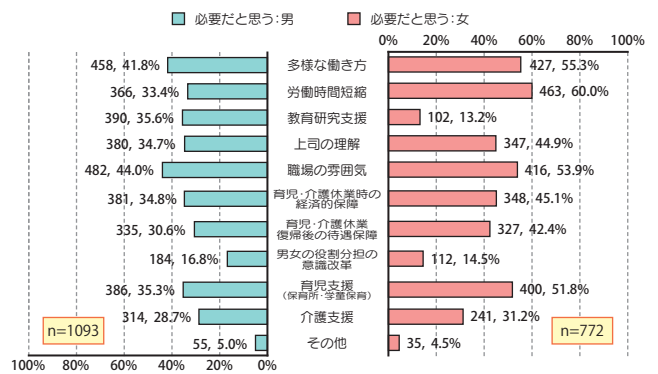
前回調査より女性教員・研究員で支持が3%程度減っている。

仕事を継続する上での困難を感じたことがあるか(全体)



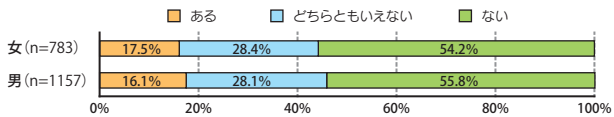
女性の7割近くが困難を感じたことがあると回答している。男女ともに前回調査と大差がない。

ワークライフバランス実現への取組として必要なものは何か(全体)【複数回答可】



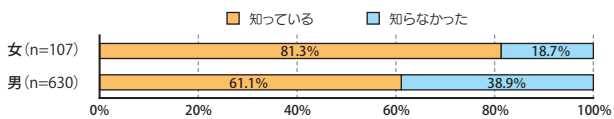
「労働時間短縮」及び「育児支援」を挙げた女性が比較的多いのが特徴。また「職場の雰囲気」は男女ともに多い。

性別による差別を感じたことがあるか(全体)



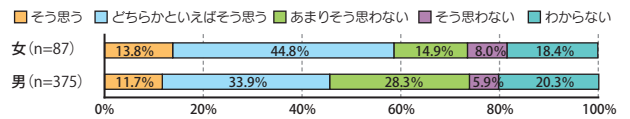
前回とほぼ同様の結果となった。

「女性研究者研究活動支援事業」の認知度(教員・研究員)



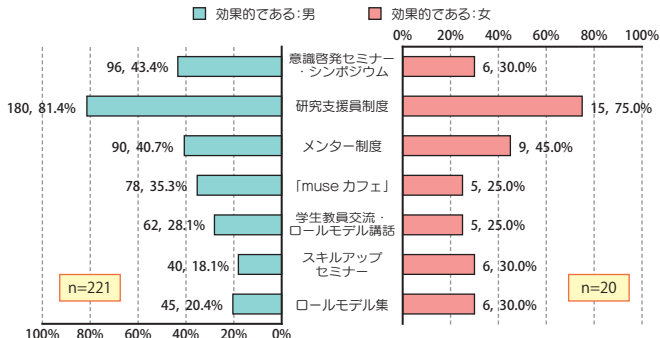
事業についてはある程度認知されている。

「女性研究者研究活動支援事業」の成果(教員・研究員)



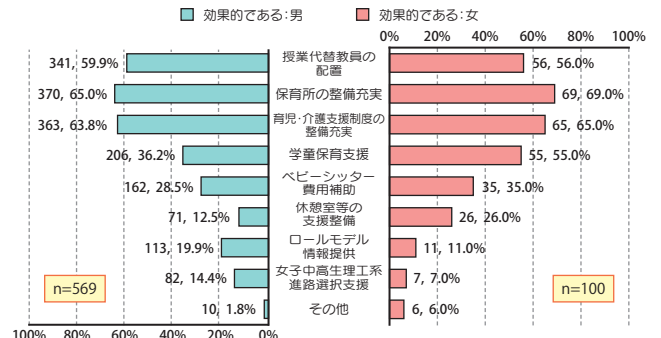
何らかの成果があったと回答した者は、女性が約59%に対し、男性が約45%となっている。

「女性研究者研究活動支援事業」で実施してきたもののうち、女性研究者支援及び次世代女性研究者育成に効果的なもの【3つ選択】(教員・研究員)



男女とも「研究支援員制度」が高く、以下「意識啓発セミナー・シンポジウム」、「メンター制度」の順であった。

その他女性研究者支援及び次世代女性研究者支援に効果的なもの(教員・研究員)【複数回答可】



男女とも「保育所の整備充実」が最も高く、「授業代替教員の配置」「育児・介護支援制度の整備充実」が続いている。ライフイベント期におけるハード・ソフト両面からの整備充実が求められている。



水産学部
(男女共同参画推進委員会委員)
山本 智子 准教授

水産学部では平成21年度以降、教員の約1割弱を女性教員が占める状態が続いてきました。今年度4月に、「実績が同程度であれば女性を優先して採用する」ことを明示した公募を行うプラスファクター方式によって助教を採用し、女性の割合は53名中5名になりました。技術職員は10名中2名を女性が占め、小型船舶や大型飼育施設の管理、潜水調査の補助や潜水機器の管理、分析機器の管理などを行っています。また、今年度6月に練習船の三等航海士にも女性を採用し、長期間寝食を共にする乗船実習において、女子学生の指導体制が充実しました。このような流れは、安定して約3分の1を女子学生が占めるという状態を継続してきたことの延長線上にあると考えています。平成14年度を最後に廃止された航海士養成のための専攻科でも、最終年にはほぼ半数を女子学生が占めるなど、水産学部の男女共同参画は学生によって先導されてきたようです。このことは、教職員の女性比率を押し上げる

ことに直接つながっただけでなく、彼女らへの指導を充実させ女性が珍しい分野に進むにあたってのロールモデルを提供する必要性を認識させる力となりました。

前述のプラスファクター方式は、平成27年度まで継続する予定であり、今後も女性教員の増加が期待されます。練習船をはじめ、施設面の女性増加への対応は少しずつ進んでおり、今後も機会をとらえて継続する予定です。また、男子学生にとっても、この環境は社会に出たときの力となり得ると考えており、現在改訂中のカリキュラムでも関連する項目を取り入れることを検討しています。



乗船実習時の航海当直の様子

■ 女性研究者と学長との懇談会を開催

10月4日、前田学長と女性研究者11名との懇談会が行われました。

女性研究者から、産休・育休中の代替教員の措置や、子供の生活のリズムに合わせた勤務への配慮、SNSなどを活用した相談体制の多様化などの必要性の指摘のほか、出産・育児による研究の中断に対する不安や身近に相談できる適当な相手がないなどの悩みが出されました。さらにライフイベントと研究等を両立していく上で、周囲の理解が不可欠であるなど、構成員全体の男女共同参画に対する意識改革の重要性も改めて浮き彫りとなりました。最後に、前田学長が、「皆さんから出た意見等を踏まえ、今後男女共同参画推進センターを中心に対策を具体化していきたい」と述べ、懇談会を締めくくりました。



■ 女性研究者キャリア形成セミナーを開催

1月31日、宮崎大学フロンティア実験総合科学センターの伊達 紫教授(理事補佐・清花アテナ男女共同参画推進室長)が「臨床医から生命学者への私の道のり」と題して講演を行いました。桜ヶ丘地区で開催したセミナーには、26名の女性研究者や女子大学院生等が参加。伊達先生は、臨床医からペプチド研究者へのキャリアパスや現在の摂食・エネルギー代謝調節機構の解明に係る研究活動のほか、責任者として携わっている女性研究者支援をはじめとする男女共同参画の取組の紹介を通じて、性別に関わりなく、ひたむきに研究に邁進することの大切さや、より多くの女性研究者の活躍が大学や社会の活性化に不可欠であることについて述べました。



■ 英語論文作成・英語プレゼンテーションワークショップを開催

国際的な活躍を目指す女性研究者の英語運用能力の向上を図ることを目的として、2月21日・22日、2月28日の3回にわたって、「英語論文作成・英語プレゼンテーションワークショップ」を開催しました。今回は、女性研究者等のニーズを踏まえ、経験者向けの「採択される英語論文の書き方・英語による効果的なプレゼンテーション技法に係るワークショップ」と初心者のための「英語プレゼンテーションワークショップ」を企画したもので、女性研究者や女子学生のほか、男性研究者や男子学生の延べ72名(うち女性36名)が参加しました。参加者は、英語論文作成上の表現方法や構造、英語プレゼンテーションにおける効果的な聴衆へのアプローチや質疑応答の仕方などのポイントを学ぶ実り多いワークショップとなりました。

なお、28日のワークショップは、九州・沖縄アイランド女性研究者支援ネットワーク(Q-wea)の構成大学である沖縄科学技術大学院大学との連携による講師派遣で実現したものです。



鹿大の女性研究者に Close-up!

鹿児島大学で研究している女性研究者を紹介します。



小橋 乃子 特任助教 (鹿児島大学大学院理工学研究科 海洋土木工学専攻)

Profile

2002年3月 九州大学大学院工学研究科建設システム工学専攻 博士後期課程修了
博士(工学)取得[九州大学]
2002年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)採用
2004年4月 東京大学大学院農学生命科学研究科 研究生
2007年8月 鹿児島大学工学部プロジェクト研究員
2013年7月 現職

— 沿岸環境研究を通じて「持続可能な社会」をめざす

私たちの生活は自然から様々な恩恵を受けていますが、同時に、環境に大きなインパクトを与えています。『持続可能な社会』という言葉聞いたことがあると思いますが、自然を守りつつ現在の生活レベルを維持していくためには、いろいろな工夫と規制が必要です。このような問題に答えることを最終的な目的として、私は沿岸環境に着目した研究を行っています。具体的には、河川や内湾の水環境を調査するとともに、海域の低次生態系や流れをモデル化した数値シミュレーションによって、沿岸環境の評価や予測をしています。

— 分野を超えて環境研究に取り組む

最初に所属した研究室で、博士論文のテーマでもあった「沿岸域の水質改善技術の開発」に携わりました。当時は技術の実用化という目的に邁進していましたが、一方で、自分自身、環境についてどのくらい理解しているのか?という疑問もありました。そこで、工学部で学位を取得した後、植物プランクトンを専門とする農学系の研究室にお世話になりました。生物の多様性を垣間見ると、生態系の予測や再現の難しさを実感しますが、何とかそこに挑戦していきたいと研究を推進しています。

— 「リケジョ仲間」が研究活動の原動力

ここに示した経歴に『土木』というワードは出てきませんが、私は土木学科の出身です。女性が少ない環境だったこともあり、博士号を取得した後でも「仕事は続けるの?」と聞かれ、びっくりしたことを覚えています。今では土木業界で活躍する女性も増えましたが、そういった中で、特に元気をもらっているの

が、同世代の『リケジョ仲間』です。忙しくてなかなか連絡も取れませんが、彼女たちに恥ずかしくないように頑張ろうというのが一つのモチベーションになっています。また、学生時代から現在に至るまで、本当に多機関・多分野の先生方にお世話になっています。その先生方に恩返しができるよう、そして、私も後進のお手伝いができるよう、とにかく粘り強く研究を続けていこうと思っています。

— これから研究者をめざそうとする方へのメッセージ

私は最初から研究者になりたいと思っていたわけでもありません。何か創造的な仕事がしたいと工学部に進学したのですが、研究室に入ってみて初めて、『研究って超・クリエイティブ!』ということに気付いたのです。自分でデータを取り、解析し、思考を組み立てるという一連の作業は、たとえ失敗があっても、とても面白いものです。そういう視点で見ると、研究生活ももっと身近に感じられるのではないのでしょうか?まずは、博士前期課程への進学をお勧めします!!4年生の1年間だけでは研究の醍醐味はなかなか味わえないですよ(笑)。



内湾の底質を調査している様子(岩手県・大槌湾にて)

男女共同参画推進センター短信

*大学入試センター試験時保育支援を実施

大学入試センター試験時に試験監督等に従事する必要のある教職員に対する保育支援として、1月18日・19日に鹿児島市内の学外保育施設とさくらっ子保育園(桜ヶ丘キャンパス)において実施しました。利用者からは「安心して預けることができ、業務に集中できた」などといった意見がきかれました。



*日本微生物生態学会ランチョンシンポジウム in 鹿大 を開催

11月23日に、日本微生物学会第29回ランチョンシンポジウム「アクティブな研究生活をサポート!育児・キャリアアップ世代を生き抜く仕事術」が開催されました。鹿児島大学から男女共同参画推進センターの取組紹介や研究支援員制度利用研究者による報告がありました。

*職員間ランチョンカフェを開催

「整理収納アドバイザーから聞く、2014年の心地よい暮らしづくり」と題し、職員を対象として、12月26日にランチョンカフェを開催しました。鹿児島ウーマンライフ研究会代表の矢野圭夏氏を講師に招いて、心と物の関係を見直す心理的な解決法や自分らしい暮らし方について話題提供いただきました。



*鹿児島市「サンエールフェスタ2014」のポスター展に参加

1月24日から2月3日にかけて開催された鹿児島市主催の「サンエールフェスタ2014」において、男女共同参画推進センター事業紹介と平成25年度オープンキャンパス企画「ガールズ☆Talk」に協力した女子大学院生の制作による研究等紹介のポスターを展示しました。



Information

平成26年度第1期研究支援員制度について

研究支援員制度は、平成26年度から自主財源により実施しますが、予算承認の関係で、第1期の募集時期が3月末以降になる見込みです。また、申請者には全員面談を実施した上で、支援の可否や支援時間を決定させていただくこととなりますので、あらかじめご承知おきください。

「鹿大ジャーナル」に 男女共同参画推進センターの取組紹介

鹿児島大学広報誌「鹿大ジャーナル」195号(3月刊行)の特集において文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」の取組を中心とした男女共同参画推進センターの取組が紹介されていますのでご覧ください。



編集後記

2年半の「女性研究者研究活動支援事業」の実施を受け、平成26年度から大学独自で女性研究者支援を継続・発展しつつ、女性研究者の採用・登用の促進を図ることが求められています。男女共同参画推進センターは、意識調査での教職員の皆様からの声などを踏まえ、部局等と連携協力しながら、女性研究者支援を含む男女共同参画の推進に取り組んで参りますので、皆様の一層のご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。